

# 古代オリンピック競技の起源

阿 部 正 臣

## 序

今までオリンピック<sup>(1)</sup>の起源という問題に関していろいろと論じられ、論議がかわされつきたという感じもしないではないが、祭礼と競技に関する問題を掘りおこすと、依然として問題が大きくクローズアップされてくるのである。

オリンピックの祭は、

- (1) ゼウスの祭礼であること、
- (2) BC776年以後の夏至後の満月に、4年ごとに行われること、
- (3) 祭には平和休戦が設けられること、
- (4) 盛大な競技が催されること、
- (5) 競技の行われる前に必ず供犠がなされること、
- (6) 競技の優勝者にはオリーブの冠が与えられること、
- (7) 女性が除外されること、

などが、その特色として注目される。

しかしながら、祭礼や競技に関する伝説をみると、種々様々な要素が織り込まれて、きわめて複雑な来歴があることを知る。たとへばクレタ、カリヤ、リデアなどのギリシア以前の要素が多分にあると思われる。また神託と英雄崇拜とも密接な関係をもち、エリスに於ける政治的葛藤も反影している。

したがって、この祭礼と競技に関して考察することは、単にオリンピックの起源という問題だけに止まらず、古代ギリシア民族の生活史を探るためにも重要なことである。

## I

オリンピックはその歴史の初頭から神聖な場所であったといわれる。ここを流れるアルフェイオス川は薬効があるとされ、特に癲病患者の療養に用いられた川で、ギリシア以前の先住民たちも、沼の女神・リムナチスをここに祭っていたし、また非武力的といわれた第1次ギリシア民族の侵入の後も、ここにヘラの神殿をつくっている。現在のオリンピックは百花繚乱の遺跡であるが、往時は不毛の湿地で爬虫類や毒虫の住家

## 古代オリンピック競技の起源

であった。こうした丘と川の流れに囲まれた地が、神話を求めたり、無病臭災を祈る場所として格好な土地であったのであろう。

ストラボン<sup>(2)</sup>は、祭典競技が創設される以前には有名な神託所であったことを印している。オリンピアは、すでに久しくオリンピアのゼウスが予言を授ける場所として有名であった。神殿の声価は後世にいたるまで高かったが、それが聖職者達とオリンピアの競技によって一層高められた。オリンピアの競技は神に奉納されて、他のどの地方の競技よりも重要なものだと信じられていた。またピンダー<sup>(3)</sup>も同じような記事を著わしている。神託はヘラクレスの時代以前に行われていた。イアミダイとクリチアダイ家は伝統的な神託の庇護者であって、ペロポネリスの中で最も古くて有名なものであった。またこの地はエリスとピサの境にあったために司率権が相当混乱している。

ズウスの祭礼と競技が何時ごろより行われていたかについては、ギリシアの伝説はまちまちである。BC 8・9世紀にイフトスによって行われたオリンピアの祭はドーリア人の侵入に伴う絶え間ない戦争に中断され、忘れられていた古い祭礼の復活であった<sup>(4)</sup>。もしイフトスの時代にゼウスの祭礼が存在し、競技がオリンピアで行われていたとすれば、オキユロスの率いるアイトリア人の居来以前に存在しなければならない。というのは、元来オリンピアはエリスのものでなく、ピサのものであるから<sup>(5)</sup>。ピサは少なくとも、BC 5・6世紀までも、その司率権を主張しつづけている<sup>(6)</sup>。もしゼウスの祭礼と競技がアイトリア系のエリス人に加えられたとすれば、ピサの覇権は信用できないものになろう。

オリンピアに関する伝説の多くはギリシア・ローマ時代につくられ、結びつけられたものであるが、神話的な色彩が強く漂っている。そうした伝説を解釈していく上に、留意しなければならないことは、第一に、その古さを誇張して祭礼の栄誉をたたえ、賞賛する傾向をもつことである。この古さを求めんとする傾向は、オリンピアで発見された銅の円盤の銘刻によく説明されている。この円盤の一面には正規の 255 オリンピアードの日付 A・D 241 年が印され、コリントスの競技者ポプリオス・オスクレピアデスによって奉納されたことになっているが、他面には元老院と執政官の親戚にあたるフラビウス・スクライボニアスの名が 456 オリンピアードという異常な日付をもって記されている<sup>(7)</sup>。これにしたがえば、競技会の創設は BC 1580 年となり、実在しえない年代となる。第 2 に、オリンピアの主な権威者たちがエリスの関係者であるために、聖域の管轄権からピサ人を排し、自分たちの都合のよいように伝説を省いたり、付加えたりしていることである。幸にもピサ人の伝説の継片が存在しているの

で、二つの伝説を比較検討しながら論を進めよう。

初期の権威者であるピンダーはオリンピア讃歌の中でペロップスの物語を告げているが、必ずしも、競技会の創設とペロップスを結びつけていないし、またオリンピア競技の主要種目ともいべき戦車競技をもそれより除いている。それで真の技会の創設者はアルクメネの息子ヘラクレスであるという。彼はアウゲア人を征服した後、ペロップの墓にその戦利品を献じて厳聖なる競技会を開催した人で、アルチスの森に聖域を定め、クロノスという丘を命名し、聖なるオリーブの木をオリンピアに移植した人であるといい、また競技会の正規の審判官をアイトリア人が管理するという規則を作った人でもあるという<sup>(8)</sup>。

これを注意深く解釈していくと、歴史的な基礎に立っているかどうかは疑わしい。これは、エリス人がヘラクレスを不倶戴天の敵とみなしていることから考えても矛盾する<sup>(9)</sup>。さらに監督官選出の部分は、作意がはっきりしている。あたかもドーリア人がペロポネリスの征服を正当化するために監督官の権利を主張しているかのようである。それでエリス人は、ヘラクレスがオキュロスとイフトスによって復活された競技会の創設者であることを口実にして、オリンピアの強奪を正当化しようとしている。またヘラクレスとイフトスに基づくものとするところにも疑い点がある。両者とも平和と善意の促進者として表徴され、聖なる休戦を規定し、ともにオリーブの葉冠を加えている。もし本来の伝説が聖なる休戦とオリーブの冠をヘラクレスに基づくものであるとするなら、多かれ少なかれ、歴史的にはイフトスに帰している同じ伝説の発展を説明するのに困難が生じてくる。つまり、イフトスに基づくものとするれば、英雄に対する譲歩として不自然になる。これを切離す第一手段として、イダのヘラクレスに移行させたのである。であるから、この伝説は双方とも全く信頼できない。

後代の歴史家や古代研究家の著述にも、多々信頼できないものがある。オリンピアの歴史の神話的な記事はパウサニアスやフレゴンによって十分に与えられているから、これらの記事に関して十分に表わしてみよう。特にこれらの中には、エリス人とピサ人の対抗的な説が現われていることに注目したい。

パウサニアスの伝えるところによれば、競技会は幼児ゼウスを世話するためにクレタから来たイダのヘラクレスによって創設されたという。5人兄弟の最年長者であるヘラクレスは、戯れに兄弟達を競走させて、勝者に野生オリーブの葉冠を与え、この思い出に彼らコウレテス家の5人兄弟を記念して、5年目ごとに競技会を開催するように定めたといい、また一方では、ゼウスがオリンピアで地上の支配権を争ってクロノスと相撲を取ったこと、アポロがヘルメスとアレーにそれぞれ競走とボクシングを

## 古代オリンピア競技の起源

して勝ったこと、神々たちがオリンピアで争ったことなどを伝えている<sup>10)</sup>。

パウサニアスは、オキュロスの競技会創設と復活の間に、6名の英雄たちの司祭した祭礼を列記している。

- (1) ヘラクレス系でクレタ出身のクリメノス。
- (2) クリメノスを廃したアエトリオスの子エンデミオン（彼は3人の息子パイオン、エペイオス、アイトロスに王冠のための競走を行わせた）。
- (3) ペロップス。
- (4) アミタオン。
- (5) ペリアスとネレウス。
- (6) アウゲウスとヘラクレス。

これは、エリスの古代研究家がパウサニアスに語ったものであるが、明らかに祭礼の古さを権威づけ、エリスの権利を正当化しようとしている。これは後代の神話学者の典型ともいうべきものである。話の中にクレタの要素を織り込み、競技会を司祭した人たちをホーマー時代の族長や地方的な王の名に結びつけ、エペイオスやアウゲウスはエリスの権利を証拠づけるために付加えている。オイノマオスが省かれ、ペロップスが残されている。アウゲウスとヘラクレスの関係は、イオルコスから実兄のペリアスを追い出したネレウスと同様、全く馬鹿げている。アミタオンは競技会のための擬人であると考えられる。ゼウスと相撲を取ったクロノス、エンデミオンの息子の競走などの記事は、王冠のための一種の儀式的な競技会の存在を意味するものと推定されるが、競技的な隠喩以外のものではあるまい。

ハドリアの地で自分の歴史を編纂したトラレスのフレゴンは多彩な記事を与えている。オリンピア競技とその賞は、パイソス、ペロップス、ヘラクレスが創設した後、イフトスの時代まで無視されていた。ペロポネソス中に都市国家間の斗争が起り、リクルゴス、イフトス、クレオテネスは民族の平和と団結を切望して古代のしきたりであった競技会を復活させることにした。彼らがデルフィの神託を請うと、祭礼の参加を希望する都市に休戦を要求し、これを是認させねばならないということであった。監督官の司祭する競技規則は刻み込まれたものの、ペロポネリスの住民は団結力に乏しく、競技会に対して冷酷であったから、悪病が流行した。再び神託を請うと、悪病は祭礼を無視したゼウスの怒りであるとお告げであった。それでもなおかつ疑いが晴れなかったので、ペロポネソスの人たちはまた神託を請うと、オリンピアの祭壇に供犠を捧げてエリスの予言者の命令に従うようにとのことであった。したがって、彼らはエリス人に競技の主宰権を任せたのである。またゼウスの崇拝を最初に確立させ

たのはペイソスであり、彼の後にペロップスがオイノマオスの死を弔って競技会と賞を定め、アンピトリオンの子ヘラクレスが祖父のペロップスのために供犠と競技会を行った。第1回から第5回までのオリンピアードの間は、葉冠が与えられなかったが、第6回になってエリスの人たちが神託を請うと、「リンゴの実を賞として与えるな。細い蜘蛛の巣のかかった野生オリーブの冠を勝者に置け」とのことであったので、オリンピアに戻った使者は、蜘蛛の糸でおおわれた野生オリーブを見つけ、その周囲に柵をめぐらし、その木から勝者の冠をつくったのである<sup>(1)</sup>。

多くの食い違う点があるが、この著述の初めの部分にはピサ人の伝説が含まれている。クレタの伝説とイダのヘラクレスが消え、ピサ名祖の英雄ペイソスが現われている。またエペイオス、アウゲッス、オキュロスが省かれているが、フレゴンの断片によれば、競技会はピサ王オイノマオスの死を弔うために、ペロップスによって開催されたものであるという。その日付は、ともかくとして、葬祭競技の起源の初期のものとして、唯一の記事であることに注目できよう。またピサ王クレオテネスはイフトスとリクルゴスの競技会復活に密接な関係を持っているから、パウサニアスはイフトスとリクルゴスのみを述べ、アフリカヌスはイフトスだけの栄誉を記していると考えられる。ピサ人の権利を取るために、エリス人が相当な努力をしていることを考えると、ここにピサ人の伝説に正しいものがある。

## II

近代になって多くの学者達は競技会に関して宗教的な説明をしようと努めてきたが、それらの考察の多くは、究極的には葬祭を起源とする競技会と、王位権承を競う儀式に起源を求める二つの仮説に絞られる。

オリンピアの競技は、死者の魂を慰めるために、地方的な英雄ヘロップスを誉えて行われた葬祭競技に由来する<sup>(1)</sup>。彼はアルフェイオス川の河岸に埋葬され、墓の祭壇には多くの見知らぬ人々が集った。それでオリンピアの競技の際には足の速さと最高の力の緊張がペロップスの競走路で戦われ、勝利者の名は後世にまでとどろいた<sup>(2)</sup>。この学説は死者崇拜の学説に結びつけているリッジウェイによって全面的に採用されている<sup>(3)</sup>。

これはギリシアに一般的に広がっている習慣と一致するから興味深い<sup>(4)</sup>。歴史時代に於いて競技的な祭礼は、しばしば、この世を去った指導者や戦士の栄誉をたたえて行われていた。ホーマーの叙事詩には、貴族の葬儀の一部として競技が行われていたことが描かれている<sup>(5)</sup>。これらの事実、競技的な祭礼が葬祭競技に由来することを

## 古代オリンピック競技の起源

演繹的に可能とするが、全体的にみて、競技的な祭礼はこのようなものに由来するという証拠から余りにも掛離れているし、祭と競技が結びつかない。<sup>(6)</sup>また北方から好戦的な種族がゼウスの信仰を持って移住して来たといっても、それぞれの祭礼はそれ自体の価値に於いて判断しなければならない。特にオリンピックの場合には、フレゴンが最もらしく見せかけているデルフィの神託を除いて、競技会がペロップスの葬儀に結びつくものがない。これに対抗する学説は、王位権承を競う儀式の中にオリンピック競技の起源を求める・ケンブリッジ学派の学者達によって主張されている<sup>(7)</sup>。

この学説は20世紀の初頭にエ・ビー・クックによって単純な形で発表されたが、その後ジェームス・フレザーやコンフォードによって詳細に理論づけられた。その中でジェームス・フレザーは葬祭競技と王位権承競技を融合しようとした競技会は競技に楽しみを見いだして来た故人の魂を特に慰めるもので、その種目は人間の供儀に代るもの、つまり儀式的な試合である戦車競技で、これは故人の所有していた武器やその他のものを勝者に受けつがせるものである。エ・ビー・クックは、戦車競走に於けるオリンピックの勝者を、神から授った王の子孫であると見做した。王権は競技によって決定され、王は定期にその称号を守らねばならなかった。ちょうどオイノマオスはそのような王の一人であった。コンフォードは、これを祖述にして、競技に勝てる者が空の神ゼウスの権化とされ、雨・雷などを支配すると考えられて、ゼウスの聖木としてのオリーブが与えられたと説き、またペロップスがヒッポダミアと結婚することは太陽（ペロップス）の車に月（ヒッポダミア）が乗って走ることを示し、オリンピックの戦車競技と8年祭の象徴であるといっている<sup>(8)</sup>。さらにこれと同じような競技会を思いださせるものには、エンデミオンの伝説やクロノスと相撲を取ったゼウスの伝説の中に見られることや、またかつては、死ぬまで武器を取って闘ったものがオリンピック競技の一部を形成しているというプルタークの記事から試合の殺人的な性格を指摘している<sup>(9)</sup>。

これらペロップスの伝説や他の多くの伝承は、王位継承者に関係のある古代の習慣の一部とみなすことができるにせよ、必ずしも、これらの習慣はオリンピックの競技に関係があったり、コンフォードのいうような王位継承の競技によって、王位が引き継がれたとは思えない。むしろ、ピサに於ける政治的勢力の葛藤を物語るものと解すべきであろう。また実際にオリンピックでは、第25回まで戦車競技は行われていないし、さらに誤って人を殺した為に賞を与えられなかった記録がある<sup>(10)</sup>。

このように宗教的な意義が競技に結びつかない事実、ギリシア競技は宗教と密接な関係があるけれど、競技の起源は非宗教的で独自のなものである。それは一般的なプ

レー愛と闘争愛の自然的・自発的な結果であり、その性格は好戦的な民族によって決定された。このことに関しては、ホーマーの叙事詩の中に見ることができる。そこではすでに、競技が明確な条件と規則の下で行われるほどまで十分な発達をとげている。ボクサーは手に皮紐を巻き、戦車競走に於ける御者は自分の戦車のみを制している。このような習慣は競技の長い伝統を意味するものである。

都市国家間の絶え間ない闘いは競技に軍事的な価値を与えるに至ったが、これらの競技を行うにあたって、平和な一時が必要であった。そうした条件は、ギリシアに於いては、宗教的な擁護の下にのみ得ることができた。ホーマー時代に於ける競技は葬儀の一行事として行われているが、すでに競技は日常生活の一部を形成していたのであるから、リッジウェイがいうような死者の霊を慰めるものではなく、葬儀に数多くの族長たちを集めて来客を楽しませるに最も適した手段であった。同様に宗教的な祭礼に於いても、これらの祭礼にのみ必要な安全を提携して競技が行われた。集った人々はある種の娯楽を必要としたから、常に催し物を行ったのである。それは演劇、音楽、文学的なものを若干備えた競演会といったものもあったが、ほとんどが競技的なものであった。またホーマー時代や後代に於いても、競技は宗教的な祭礼に限られていない。オデッセウスがアルキナウス宮殿に到着した時、即座に競技が彼の名誉となって浮びあがったし、アレクサンダーは、東方出征に於いて、彼の軍団と居住民の娯楽として競技会を各地で行っている。

### III

祭典競技が行われていた時代の習慣、即ち、4年間隔、オリーブの葉冠、聖なる休戦、女性の除外などの事柄に、祭礼自身の起源とその性格を見ることができる。まず、祭典競技の時期について考えてみよう。

祭典競技は4年ごとに開催されていたが、この回帰は何に基づき、如何なる関係を持っているのだろうか。

ピンダーによれば、この競技は、一は49ヶ月目に、他は50ヶ月目に行われる。それ故、一はアポロニオスの月、他はパルテニオスの月に行われるという。またこのことはイリアス10巻252行の註にも、50ヶ月と49ヶ月とに行われるという記事から確信づけられる<sup>4)</sup>。4年ごとの祭であるから、1年を12月として計算すると、それぞれ2ヶ月と1ヶ月、計3ヶ月の余りが生ずる。これは、ギリシア人が太陰暦を用いていたからで、太陽暦(365日 $\frac{1}{4}$ )と太陰暦(355日)の間に11日 $\frac{1}{4}$ の差が生じるためである。それにしても、本来4年ごとの祭であれば、常に49ヶ月でも、50ヶ月でもよいはずで

ある。ここにオリンピックの祭礼が、本来4年ごとの祭ではなかったことを意味する鍵が与えられている。ちょうど、太陽暦の8年は太陰暦の8年に3ヶ月をプラスした99ヶ月に等しい。であるから、本来は8年ごとの祭であったことを意味している。特に初期のギリシア人にとっては、生活の安寧、並びに農作物の収穫などのために正しい日付が必要であったから、正規の暦は深い宗教的な意義を持っていた。ヘシオドの時代の農夫たちはある特定の星の出入でもって暦を印していたし、実際に宗教的な儀式を持って記録していた<sup>(2)</sup>。また今日のイタリアやギリシアの農夫たちにも、ある儀式でもって季節、月を印すならわしが昔から伝っているし、年の始めにお祓の儀式をすることも一般に行われているといわれる。特に陰暦を用いたギリシア人にとって、99ヶ月の回帰が太陽暦と一致するという発見はきわめて重要な発見であったことから照合すれば、地域社会の最も重要な神と結びつくことは当然である。それは、オリンピックのように、神自身が空の神であればなおさらのことである。このようにみえてくると、必ずしも、元来オリンピックの祭礼が、8年ごとに開かれていたということは不可能ではない。ピチアの祭礼が、4年祭として BC 582年に再組織される以前には、そのような8年祭として開かれていたし、さらにデルフィのステプテリア、ヘロイス、カリアの三大祭は、後代に於いても、8年ごとに開かれ継続されている。またテーベには、ダフネホリア、アポロと結びついた8年祭が存在していた。しかし、8年の回帰は不都合にも長すぎるので、ちょうど月はじめと中間に特別な儀式を持つように、回帰のはじめだけでなく、中間にも儀式を行おうとする習慣が起ったと考えられる。このようにして、99ヶ月の回帰を50ヶ月と49ヶ月に分割することにより、オリンピックの祭礼は4年祭になったのであろう。この変化は、少なくとも、BC 776年までに生じ、オリンピックから他の土地に模倣されたと思われる。

エリス人の暦によれば、アポロニオスは8月で、パルテニオスは夏至後の9月である<sup>(3)</sup>。アポロニオスの最初の満月は8月6日で、最後の満月は9月5日である。パルテニオスの最初の満月は8月20日で、最後の満月は6月19日である。結果的に、祭礼は常に8月6日から9月19日の間に行われたが、ピチア、アルカデア、汎アテネなどの大きな祭礼でも、同じ時期に行われている。この事実に対して的確な説明を与えることはできないが、おそらく、これらの祭礼は最初から農業的な集団に散在していたことに注目したい。農夫たちにとっては、この6週間は休息の時であった。収穫物が集められ、穀物から糠殻を吹きわけて、6月以前に貯蔵を終えると、彼らに一時的な休みがおとずれた。「人々は、ぶどうについてオリーブなどの果実の仕事が始まるまで、膝を休めて牛の綱をとき離す」。この6週間のあいだ人々は農業的な仕事をはな



れて余暇を持ち、ある時は部落間の戦いに趣向き、ある時は部落と部落のなごやかな会合をもって結びついた。7月の下旬を境に猛暑の夏が過ぎ去ると、大地や海上の旅は容易になる。穀物とぶどうの収穫期の間のこの祭は、すでに取入れの終えた穀物の謝恩祭と、来たるべき果実の吉兆祝といった農業的な性格を持つものであったことも可能である。少なくとも、4年ごとのゼウスの祭礼は、初期のある農業的な祭礼に付加えられた可能性がきわめて大きい。

さらに競技会の起源に関する説明を推し進めよう。競技は儀式的な意味を持たず、自然に何かの祭礼に附着したものらしいが、ゼウスの祭礼と競技が結びつくには具体的な根拠が必要である。本質的にギリシア競技は軍事的な起源にある。困難を排してエリスとピチアに侵入して来た種族は好戦的な種族であった。ゼウスは、植物の神、天候の神、生長の神としてだけでなく、戦の神としてこれらの種族に同盟を要請したのである。そのためにゼウスの祭礼には戦争や殺害から手を引く聖なる休戦があったと考えられる。ゼウスが戦の神であったから、ヘラクレスがアウゲア人を征服した時に勝利を記念して、ゼウスへの感謝の競技会を創設したのである。ホーマーの中では、ゼウスは神々の主神の地位にあるが、彼の軍事的な性格はエリスに侵入したフィリア人の記事の中に特に際立つものがある<sup>(4)</sup>。彼らがアルフエイオス川に到達した時、まず彼らはゼウスに供犠を献げてから、ポセイドンとアテネに供犠を献げている。また彼らが勝利を得た後にもゼウスに感謝を念じている。それで、もしゼウスがペロポネリス全体の神々の主神として考えられているならば、この祭礼は武器を捨てるという形体を取るべきであろうし、武器を捨てることは彼らを結びつけることになる。こうした見解は、この祭礼に競技を加えたというだけでなく、聖なる休戦、女性の除外、異国人の締出しなどを同時に説明するものである。

この祭礼は参加する者にとっては平和な一時であったが、オリンピアの休戦は祭礼独特のものであった。各種族はかなりの領域にわたって散在し、互いに敵対行為や嫌疑をもって行動していたと一般的に考えられるが、オリンピアのゼウスの權威のもとに一応統轄されていた。このように不穏な社会状況にあって、彼らは自分の所有地を離れた時の身体の危険や不在中の家族の不安などから領地を去ることはできなかった。ので、最初からオリンピアの休戦は、全エリス、さらには全ギリシアにわたって拡大されねばならなかった。

イフトスによって制定された聖なる休戦は、ヘラクレスによって提唱され、オキュロスとヘラクレスとの間の聖約によって裁可された休戦の復活としてギリシア人には考えられている。オリンピアに保存されていたという古代の円盤に刻まれているイフ

## 古代オリンピア競技の起源

トスの休戦の言葉は、特に嚴重なものであった。すべて祭礼に訪れる者はゼウスの特別な保護下に置かれ、祭礼の往復の途上に彼れの身体や所持品に手をつけることは冒瀆行為として取扱われた。マケドニアのフィリップ王でさえ、オリンピアを旅行した際、彼の傭兵がアテネのフリノオンという者から所持品を略奪したために返却して詫びねばならなかった。ペロポネリス戦役のオリンピアの休戦中にレプレアンを攻撃したスペルタ人はオリンピアのゼウスに2000ミナレの罰金を払うように宣告された。彼らは休戦の布告がまだスパルタに届いていないことを口実にして払うのを拒絶したため、エリス人はスパルタ人をオリンピアの競技から除名して締め出している<sup>(6)</sup>。後代になってエリスは「エリスの領土とその住民は神聖である。この地を犯す者はすべて呪われる。エリスを侵略する者があれば、直にエリスにかけつけること、その援助に来ぬ者もすべて呪いを受ける」<sup>(7)</sup>とさらに強力な権威をふりまいている。エリス領内に立入る時には、すべての武器を彼らに預け、再びエリスを出立するときに武器を受け取った。彼ら自身こうし方法により神聖なる生活を享受し、そのために自分達の都市を要塞化する必要もなかった。こうし安全の確保はエレスの繁栄を促し、人口の増加を計ったが、エリス人の権力には承服させるようは明確な根拠がなかったのも、ギリシア世界では必ずしも尊敬されていない<sup>(8)</sup>。ピチア人はゼウスを聖神とするからトロイ戦争に参加しなかったと<sup>(9)</sup>、ストラボンが解釈しているが、少なくとも初期に於いて、オリンピアの領域は神聖であるとされ、休戦中はすべての者がその領内に武器を携えることは許されていなかったことを示している。このような禁止は祭礼の本質的な部分であったことを示唆している。この見解を確証するものとして、BC 250年後のプログラムが武装競走で終わっていることから示される。ヒロストラスは休戦の最後を表わすものとこれを考えている<sup>(9)</sup>。

次に女性の除外について考えていこう。既婚女性はオリンピアの祭礼に存在することを許されなかったし、この期間中アルフェイオス川を渡ることさえ禁じられていた。これを犯せば、チパイアニの岩から投げだされるという死罪を受けた<sup>(10)</sup>。唯一の例外は競技場に隣接している寺院の女祭者デメトル・カミネであった。しかし、この禁止令は未婚女性には及んでいないようである。パウサニアスは「処女は祭壇の塞台まで上ることが許された。それで既婚女性が常にオリンピアから締め出されていたから、男性のみが祭壇の最上段にまでのぼることができた」<sup>(11)</sup>という記事を載せている。この文章から既婚女性は祭礼以外の時でも、オリンピアに立入ることは禁じられていたと考えられる。女性をオリンピアから除外したのは女性に関係のあるタブーの一つとして行ったのかもしれない。女性の存在はしばしば農作物や家畜の災難に関係を持

つと考えたのであろう。ローマに於けるマルス・シルバヌスの祭礼に女性の存在が許されなかったのは、家畜の世話ができなくなるからであったというし<sup>(12)</sup>、ギリシアに於いては、穀物の神エウノストスの寺院と境内に女性は立入ることは禁じられていた。プルタークは、如何なる女性でも、クロノスの寺院に入ることは許されなかったと述べている<sup>(13)</sup>。ゼウスの祭礼が初期の農業的な祭に代ったものとすれば、この見解は明確になるが、女性についてのタブーも他の要因になるだろう。既婚女性の存在ほど勇んで国を出る戦士達にとって、心を掻き乱すものはないであろうし、それが災のもとにならぬとも限らないから、すべての女性を軍事的な儀式から除外したものと考えられる。ゲロントライでのアレスの祭礼でも、女性は除外されているし、ギリシアやイタリアでのヘラクレスの祭礼からも、女性は除外されていた。オリンピアでの女性の除外は、ゼウスが戦の神であるなら、当然のことである。祭礼の軍事的な性格が、また自由出身のギリシア人のみが競技に技を競うという規則を置くことになったのであろう。はじめから競技会の参加者は種族出身の自由戦士に限定されていたので、競技会がギリシア全土に拡大されるまでの発展をとげた時、居留外人の除外は必然的な存在となっていたのであろう。

## 結 言

エリス人の伝説の中にはクレタ的な要素が強く見受けられたが、一方、デルフィの影響をうかがうことができる。リングはオリンピアの賞として、はじめは存在していたが、デルフィから直接に模倣したものである。しかし、競技会の復活はデルフィの神託の忠告に従うものだけではない。

競技会の起源は、当然、祭礼の起源と同一視すべきではない。新しい祭礼の場合には競技が同時に置かれたかもしれないが、オリンピアは古くから聖なる位置を保有していたのであるから、デルフィのように、競技が古い祭礼に加えられたと見做すべきである。

祭典競技は8年を大年とするはじめと中間点に印され、お祓の祭礼であった。それはゼウスの祭礼であり、その地域の有力な神で、その崇拝はごく初期に於いて北方からの移住民によって加えられた。この種族は好戦的で、彼らの至上の神が崇拝者の性格に自然に投映していった。彼らの祭礼は武器を離れた休戦であり、すべての武器は聖なる休戦の期間中にエリス領内へ持ち込めなかった。既婚の女性は祭礼から除かれ、競技会は自由生れの種族の戦士のみが技を競うために開られた。祭礼の時期は農事から手を離せる季節で、初秋に行われ、ぶどうとオリーブの収穫の農作を祈り祝う初

## 古代オリンピック競技の起源

期の祭礼に代ることが可能である。

## 脚註ならびに引用文献

### [I]

1. オリンピアという語は“光り輝くもの”という語源から発し、今日では競技と地名の二種類の意味がある。尚、この論文は、記念すべき書籍「オリンピア」を書いたガーディナーの偉大な業績に負うところが非常に大きい。
2. 「Geographica」, V III 3, 30より以下引用。古代オリンピックの歴史, p. 25
3. 「Olympic Ode」 V I : 353.
4. オキュロス系のイフトスと同時のラユニアの立法家リクルゴスはオリンピックの競技を定めオリンピックの祭と休戦とを復活した (Pausanias「Description of Greece」 V 4. 5~6). オキュロスの名に結びつくアイトリア人が南下して来て、エリスは非常な勢力を示した (Pausanias V. 4. 2).
5. ピサ王オイノオスとフィギア人の英雄ペロップは戦車競走をして、ペロップスがこれに勝ち、これを記念して競技会を定めたという古伝がある。またピンダーは「オリンピアのゼウスはピサが居住地である」と述べていることや、地理的にみてもピサに属するのが妥当である。
6. BC 748 年 (8回), 644年にピサは武力をもってオリンピックを主宰している  
古先オリンピック競技の歴史, p. 62.
7. 古代オリンピック競技の歴史, p. 164.  
この円盤は1879年11月3日に無傷のまま発見された。
8. Pinder Olympic Ode xi
9. Pausanias「エリス人はヘラクレスを敵と考えていた」, V. 4.
10. ギリシア史研究, p. 248. Pausanias V. 7.
11. ギリシア史研究, p. 222.

### [II]

1. ギリシア史研究, p. 248.  
体育とスポーツ, II. オリンピアの起源 Dopferd「ペロップスはピサ王でオイノマオスの後継者である」。  
D. J. Wolfel「共同社会では英雄の為に立派な場所に墓をたて礼拝するようになった」。Schroder「墓に関してはペロップスが特記すべきものでその近くで最古の競技が行われた」。
2. Pinder Olympic Ode V 88~96.
3. Ridway「Origin of Tragedy」p. 36~38  
ギリシア史研究, p. 248
4. 競技会と共に葬儀を行う習慣はエトルリア, アイルランド, コーカサス, シヤム, 北アメリカなどに於いても見られるが、ギリシアでは古くから行われ、ギリシア歴史を通じて全般的に行われている。イリアースの中で老人ネストールはアマリンセスの葬祭競技での青年時代の勝

利を思い起し、ヤーソンの祖父ペリアスの葬祭競技はオリンピアでのキプセルスの胸とアミクラエでのアポロの王冠の二つの名高い芸術品に表わされている。また葬祭競技はフローレンスの有名なフランコイスの壺やベルリンにあるアンフィアラウスの壺などの初期のものに多く、その模様が描かれている。しばしば、競技会は殆んど英雄をたたえて行われているために、起源的に葬儀と結びついたことが論じられてきた。

5. 体育とスポーツ II. オリンピアの起源, Juthener 「競技と古式がギリシアの葬祭に由来するとは考えないそれは相互に並んで発展した二つの全く異った系列である。全々かけ離れた二つの構想の間をつなぐ思考のかけ橋は死者崇拝の葬祭競技はいつの時代にも行われていたことである。不確なことはこの葬祭競技がどおしてオリンピアの神々を崇拝する競技に発展したかである」

6. ホーマー「イリアー2」23巻,

7. 戦車競走がオリンピアに登場するのは第25回からである。8年祭については後述する。

8. J. E. Harrison 「Themis」 p. 1912

V II. The Origin of the Olympic game.

ギリシア史研究, p. 193

9. ギリシア史研究, p. 194.

10. アストブライアのクレメデスはエビダロスのイコスをボクシングで殺してしまったため、賞が与えられなかった。Pausanias VI 9.6。

### [III]

1. Pinder Olympic Ode V 33. ギリシア史研究, p. 254

2. ヘシオド「労働と日々」11. 414

3. 古代オリンピックの歴史 p. 70

4. ホーマー「アイリアース」11巻 726

5. Thuchydes V. 49

6. Strabon. V III 3. 30

7. Strabon. V III 3. 30 「スパルタ人はホルスの繁栄をうたぐっていた」°

8. Strabon. V III 3. 30

9. 古代オリンピックの歴史, p. 194

10. Pousanias V I 20

11. Pausanias V. 13 古代オリンピックの歴史 p. 234, より引用

12. Warde Fowler. 「The Religious Experient」 p. 29

13. Plutarch 300 D.

(本 学 助 手)